

書評

白日高歩・小林紘一・宮澤輝臣 編

気道をめぐる治療手技
各種インターベンションのすべて

東北大学加齢医学研究所教授・呼吸器再建研究分野

近 藤 丘

最近とみに医療の安全に関する世間の目が厳しくなっているが、もちろん医療に100パーセントの安全を求めるのが不可能なことは言うまでもない。しかしながら、情報の伝達速度が以前とは比較にならないほど速やかな今日においては、より新しく、より正確な情報を手に入れて自らをアップデートしておくことが、特に先端的な医療に携わる医療者にとっては必要なことであり、その安全に配慮しつつ日々の医療を実践していると評価されるうえでも必須なことと言える。

気管支鏡は私が駆け出しの医師の頃はファイバースコープであり、画像も現在の電子スコープには遠く及ばず、手技的にも観察と可視病変の生検、末梢病巣の擦過などに限られたものであった。それが今日では内視鏡そのものは言うに及ばず、それを応用した手技、なかでも治療手技の進歩には

目覚ましいものがある。次々と新しい手技、そしてそれに伴う新しいデバイスが開発され、それが先端的医療を行う施設で試験的に実践されている。学会などでそのポジティブな評価がなされると、続いて末広がりに日本全国に手技やデバイスが浸透していくのであるが、先行する施設での経験をもとにしたガイドラインや手引きといったものが、実は追いついていないのが現状であろうと思う。

こういったことは、医療の安全という観点から現場が遅れをとっていると言わざるを得ない側面といえる。本書を拝見して、この領域においてやっとそれを補うものが出た、と正直実感した。内容は気管支鏡に関連する手技が中心ではあるが、そればかりではなく、気管切開などそのタイトルが示すごとく気道をめぐる治療手技がまとめられているきわめて斬新な企画の手引書といってよい。特に気

管支鏡に関連する手技については、先進的なことにいたるまで現状におけるほぼすべてが網羅されているといって過言ではない。とりたてて言えば、各項目は実践的なことを中心に記述・解説されているために、非常に簡潔で読みやすいばかりでなく、体裁も項目間での統一性が図られており、その点でもあらかじめよく練られたものであることを窺わせる。画像も多用され、視覚を通して直感的に理解しやすく考えてまとめられているのも高く評価できる。

また、こういった手引書的な本は、速やかにテクノロジーが進歩する現代においては、完成した時にすでにやや陳腐化していることもしばしばであるが、本書の内容はいまだ一般的とはなっていない手技も含んだ非常に新鮮なもので、今まさに活用できる内容となっている。この領域を先進的な立場で日々実践している方々による迅速な編集と執筆の努力の賜物であろう。机の書棚に置くのはもったいなく、病棟や検査室に配して実践の場で使用するために非常に有益なものといえる。

〔B5 頁184 2007年 定価
7,875円(本体7,500円+税5%) 医学書院刊〕